

第一話 部屋替えデジャブ

毎年4月の終わりから5月にかけての時期に柿ノ木寮では寮役員を選挙する。これは前期の改選と呼ばれていて、後期の改選は10月にある。寮長とも呼ばれる運営委員長は、これまでの例では3回生が立候補することが多く、その他の運営委員には4回生も2回生も立候補していた。まれに後期の改選で1回生が会計役員に選ばれることもあった。これは将来の寮長コースだと噂されることにもなるのだが、その人選は人物像によるというよりも、「寮が好きなのか、いつでも寮に居座って居る雰囲気があるか」で決められているようだった。要するに、授業にあまり出席していないか、あるいは代返などの要領がよいつてことらしい。

この改選に合わせて寮内で一斉に部屋替えが行われる。年に2回の大移動である。1回生から3回生までは籤引きで部屋と2〜3名の同室者が決められ、役員は役員部屋が予め決まっていた。しかし、4回生以上だけは自分達で部屋と相方を選べるようになっていた。これは純然たる差別そのものである。どうして上級生にだけそんな勝手が許されるのか、と不満に思う下級生が居ないわけではない。だが、このしきたりが改められそうな気配は無い。その理由の一つは、下級生もいずれば自分が上級生になることを知っているからだろう。また、籤引きで決まる部屋割りといってもそれほど我慢を強いるものでもなく、偶然の出会いが交友の幅を広げてくれる例が、多くあるからだろう。そして、このしきたりが維持される最大の理由はたぶん、そういう先輩らの住まう部屋が、じつに個性的で遊びに行くとおもしろいからではないだろうか。

吾輩ら鹿は、寮の電話室ぐらいならともかく、気安く個室まで入り込むことはしない。だから詳しく見たわけではない。でも、窓から覗き見したり、寮生同士の話を聞いたたりしていると、妙ちきりんな部屋に住まう長老寮生の生態が伝わってくる。動物学者は、吾輩ら鹿を観察するよりも、柿ノ木寮の長老部屋をフィールドワークの対象にすべきなのでは、と思つてゐる。

細面で長身の黒部先輩は、物腰も柔らかくで大声を出しているところを誰も見たことが無かった。その長老部屋の相方は、丸っこい体付きで愛嬌いっぱいの木之元先輩だったが、この二人、じつに好対照な個性を發揮して、毎日がコントの連続のようであった。黒部先輩と言えば、一人静かに物思いに耽るタイプだったのに、木之元先輩は部屋に人を呼び込んで、議論